

平成 27 年度 特別展

再会・ふくいゆかりの名宝たち 里帰り文化財展

越前や若狭には、過去に多くの素晴らしい文化財がりましたが、その多くは時々の事情により他の所有者に移り、現在ではなかなか目にすることができません。

今回の特別展では、所蔵者のご厚意によりそれらを里帰りさせ、一堂に展示・公開いたします。それらの展示品の中から担当者の独断と偏見で一押し作品介绍しますので、ご参考のうえ、ぜひ展覧会場にて実物作品の持つ力強さをご鑑賞ください。



写真1

写真1は、慶応4年（明治元年、1868）に坂井市井向で出土した「大石2号銅鐸」（個人蔵・名古屋市博物館寄託）で、国指定重要文化財に指定されています。銅鐸は、弥生時代に祭祀道具の一つとして使われていました。今年に入ってから兵庫県淡路島で新発見され、新聞やテレビで大きく取り上げられましたので、記憶され

ている方も多いと思います。

初期の頃の銅鐸は祭祀に用いる鐘として使われていましたが、時間が経つとともに装飾文様が付き、大形化して実用的ではなくなってしまいます。

本銅鐸は初現期の作例として、また、表面に動物や高床式建物、鳥、亀、杵で臼をつく（脱穀している）人物、トンボなどが描かれていることから、弥生時代人の表現や芸術感を知るのに極めて貴重な作例と言えます。

* * * *

写真2は、重要美術品「唐物文琳茶入 銘 本能寺」

（五島美術館蔵、南宋時代・13世紀）。唐物とは、現在の中国からの舶来品であることから名付けられています。また、文琳とは、りんごの形をした茶入のことを言います。本品は、数ある類品の中でも名品として名高い作品です。



写真2

本品は、越前の戦国大名であった朝倉義景が所持していたことから「朝倉文琳」と呼ばれることもありますが、朝倉氏の滅亡後に織田信長の手に渡り、その後、信長が本能寺に寄進したことから「本能寺」と呼ばれています。

現在、一乗谷朝倉氏遺跡にある義景館跡は、発掘調査され整備されていますが、四百数十年前のあの場所に、義景愛蔵の品として蔵されていたのです。恐らく館の庭園に隣接した茶室で使われていたのでしょう。

* * * *

写真3は、国宝「油滴天目茶碗」（大阪市立東洋陶磁美術館蔵）。本品は、現在の中国福建省に所在する建窯で作られました。艶やかな見事な黒地に、水に浮かぶ油滴のように輝く斑文がびっしりと現われており、我が国に伝えられた「油滴天目」の中でも、名品中の名品と言われている作品です。

元は豊臣秀次が所持し、西本願寺を経て京都三井家に伝わり、その後、若狭酒井家の蔵品となりました。若狭小浜藩主であった酒井忠義は道具持ち大名として知られ、後に「一旦こうと見込んだ道具は、たとえ將軍家のものであろうとも必ず手に入



写真3

れるという如き古道具蒐集にかけての辣腕家」と評されています。

本品は、大正12年(1923)に開催された「若洲酒井伯爵家御所蔵品入札」会に現われておらず、戦後まで同家で特別に大切に蔵されていたものです。

* * * *

写真4は、『平家物語絵巻』(林原美術館蔵)七巻より「火打合戦」。「火打合戦」は、寿永2年(1183)に、源義仲が現在の南越前町に築いた火打城を舞台として、義仲を中心とした加賀・越前勢力と、平維盛を大将とした平家軍との間で行われた合戦です。

絵巻では、川をせき止めて作った人工湖の中にある城や、義仲軍内からの内通者の情報により川のせき止めを破ることに成功し、城内に攻め込んだ平家軍の様子を描かれています。

本品は、越前松平家伝来の作品であり、現存する『平家物語絵巻』として全巻が揃ったものは本品のみで、極めて貴重な作品です。全36巻を数え、全てを並べると約940メートルにもなります。



写真4

* * * *

写真5は、重要美術品「南蛮人来朝図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)。戦国時代末期から江戸時代初期に、我が国に来航したポルトガル人の風俗を描いた屏風が数多く製作されました。主題は明瞭で、南蛮船と港における荷揚げの様子や、上陸した南蛮人一行の様子を描いており、描かれた題材一つ一つを丁寧に見ると、それぞれに意味があり、当時の様子を知るには一級の資料となります。

本作品は、昭和10年(1935)頃に三国町内の旧家から出回った作品ですが、現在知られる福井県内から流



写真5A



写真5B

出した南蛮図屏風は三国から1作品、敦賀から3作品(現在、所在不明を含む)があります。

これらの作品は、その出所地の立地から廻船関係で富を築いた豪商が所持していたものと考えられます。海の仕事に携わっていた彼らは、自らは関係することが叶わない異国との貿易の夢を、南蛮図屏風に託していたのかも知れません。

* * * *

写真6は、「悲しみのマリア画像」(南蛮文化館蔵)。福井市の奥田家に伝わったキリシタン遺物です。本品の確認は大正時代にまで遡ることができ、丸められて竹筒に入れられ、同家の土倉内に隠されていたと伝えられています。奥田家は代々医家でしたが、江戸時代にはキリシタン信者として取り調べを受けていたことが知られており、同家旧蔵の珍しい数のキリシタン遺物群とともに、キリシタン禁教時代を語る上では欠かせることのできない作品の一つです。

(水村伸行)



写真6

特別展 再会・ふくいゆかりの名宝たち 一里帰り文化財展一

開催期間：平成27年10月24日(土)～11月23日(月・祝) **会期中無休**

観覧料：一般600円／大学・高校生400円／小中学生・70歳以上の方300円 ※20名以上の団体は2割引き

木製 百万塔

「塔」は、仏教の開祖・釈尊の骨(仏舍利)を埋納した上に作られる、墓標ともいべき建物です。塔といえば、五重塔のような高層建築が思い起こされますが、これを模した小さな塔も礼拝対象として作られました。ここに紹介するのは百万塔と呼ばれる小さな塔です。

百万塔の歴史

『続日本紀』によると、百万塔は称徳天皇により恵美押勝の乱(天平宝字8年[764])後、内部に陀羅尼経を納めた高さ4寸5分、底径3寸5分の三重小塔100万基が製作されました。宝亀元年(770)4月26日に作り終え、諸寺(大安寺、東大寺、西大寺、元興寺、興福寺、薬師寺、法隆寺、弘福寺、四天王寺、崇福寺)に分割安置され、元興寺や西大寺等では「小塔院」と呼ばれる堂宇が建立されました。現在、法隆寺に分置された約4万5000基のみ伝わっています。いずれも形態や法量のばらつきも少なく、非常に均質な仕上がりから、現代の工業製品のように厳しい品質管理がなされていたことがわかり、国家の威勢やこれを支える奈良時代の工房の高い水準を知ることができます。

ところで、明治時代の神仏分離以降、衰退した法隆寺は、寺の維持資金を集めるため百万塔の一部を譲渡しました。当館で所有するこの百万塔も、法隆寺を出て民間に流れたひとつと考えられます。なお、本来塔内に収められる日本最古の印刷物とされる陀羅尼経は、残念ながら失われています。

当館蔵品は表面全体に轆轤痕を残し、基壇部上下の

帯状段や屋根部の上面の微妙な反り等の造形的特色は、法隆寺蔵品と大差ありません。相輪部は上からみると楕円形となっています。また、法隆寺蔵品に比べ、竜車に当たる部分と最上部宝輪の上部の盛り上がりが少ないこと、伏鉢が法隆寺蔵品では壺状に膨らむのに対し、当館品はそろばん玉形にわずかに膨らむ程度であることが相違しますが、これは製作工人(工房)の差でしょうか。

相輪部・塔身部底面の墨書銘は、白土がまだらに残るため解読はできませんでした。しかし、底部の向かって左行を「右刀自」と読むことが可能であれば女性の名称と考えることができます。

百万塔と泰澄

さて、『泰澄和尚伝記』(以下『伝記』)には神護景雲元年(767)、泰澄86才の時、百万塔1万基を造立し、勅使吉備大臣に預けたと記されています。そもそも百万塔は、未成品が平城宮跡より出土していることや均質な仕上がりであることから、称徳天皇の発願により都で一括して製作されたものと考えられますが、『伝記』に「天下の華夷、結縁造立す」とあるように、広く全国に百万塔製作または結縁を求めた記事・伝承が伝わっていたのでしょうか。『伝記』の記事はいささか唐突で評価が難しいですが、百万塔と泰澄との意外な結び付きの意味については今後検討すべき課題といえるでしょう。

(河村健史)

■ 法量(cm)

総高21.0／底径10.3／塔身経納め穴径2.5／深さ8.0

■ 形状・構造 塔身と相輪に分かれる。塔身は底面円型の基壇に屋根を3層に作り出し三重塔形とする。頂上部中心から下方に円筒形の穴が穿たれる。相輪部は上から宝珠、皿状の竜車、6つの宝輪(最上部は大径)、伏鉢を表す。塔身・相輪それぞれ轆轤成形し、厚く白土を塗り仕上げる。

■ 保存状態 2・3層屋根部分で欠け。同部分は別材後補。塔身と相輪は本来別物を合わせたと考えられる。

■ 銘 塔身底面および相輪の宝輪最上段上面、仕上げ白土下の木地に墨書銘あり(判読不能)。



写真上:相輪部墨書/下:底面墨書

イナコキ

[奥行] (最大) 113cm

[幅] (最大) 59.8cm

[高] 62.0cm

今回紹介する資料はイナコキと呼ばれるものです。イナコキに漢字をあてるとすると「稲扱き」です。写真をご覧くださいれば、こういったものかご存知の方も多いでしょう。教科書にもよく見られるもので、「千歯扱き」として紹介されています。多く付けられた刃(歯)で、即ち千歯で稲や麦などの穂から籾を扱きとるところから、千歯扱きと呼ばれています。

まずは資料をよく見てみましょう。刃が付けられている木材部分を台木と言います。今回紹介するイナコキの台木の他の木材部分は台木に比べて新しいようで、恐らく傷んでしまったので交換されたのでしょう。また、前面の板に長方形の穴が開いています。使用する際には、その穴に板を入れ、その板を踏むことで安定させました。後方の2本の脚は取り外し可能で、収納する時にははずされていました(写真1)。

刃の一つひとつを穂といい、19本あり、両端は刀型、その他は剣型、全てに面取りがなされています。また、このうちの2本には家紋(橘紋か)が刻まれています。製作者を示すものかも知れません。また、穂と穂の間は丸釘2本から5本が打たれています。釘で穂の間隔を決めているようです(写真2・3)。

所有者を示す墨書銘が台木にある以外に焼印などは見られず、残念ながら、製作年代や製作者名は分かり

ません(写真3)。

千歯扱きは江戸時代に登場しました。それ以前は竹を二本使った「扱箸」と言われるものが使われていました。千歯扱きの登場は効率が大変良かったため、それまで寡婦の仕事とされていた脱穀の作業を奪ってしまうので「後家倒し」とも呼ばれました。

明治時代末には、足踏み式脱穀機と呼ばれるものが考案されました。県内では大正時代に普及し始めたようです。この足踏み式脱穀機は、ペダルを踏むことにより、逆Vの字型の歯のついたドラムが回転し、そこに当てて脱穀をするものでした。これは千歯扱きよりも労力が少なく、効率もさらに向上したものでした。戦後は発動機付の脱穀機の使用も広がり、昭和50年代以降にはコンバインも普及し、人の手で直接脱穀が行われることは少なくなりました。

県内でも、足踏み式脱穀機、コンバインと使用されてきました。しかし、そうした中で、種籾を取る際には千歯扱きを使用していたという家もありました。このイナコキがあった家でも、種籾を取るために使用していました。この家では20年ほど前、1990年代まで使われていたということで、イナコキ、千歯扱きの使用されていた例では非常に新しいものだといえます。

(川波久志)



写真1



写真2



写真3 墨書「落井 弥五右衛門様」

鯖江市落井町・蓑輪弥五右衛門家文書

鯖江市落井町は、鯖江市東部に位置する北中山地区にあり、河和田川が集落内を東から西へと流れています。江戸時代は今立郡落井村で、村高は995石余(田方795石余、畠方200石)、江戸時代を通じて福井藩領に属したやや大きな村でした。

昨年の2014年、江戸時代に落井村の庄屋を務めたこともある蓑輪弥五右衛門家に伝わった古文書が、民俗資料とともに当館へ寄贈されました。当該文書は全216点からなります。江戸時代後期の村方文書を中心に、江戸時代の手習手本や明治・大正期の版本なども含まれています。

当該文書の点数はあまり多くありませんが、水害によるものと思われる痛みや虫食いなどの破損が非常に激しい状態で、村の年貢関係の帳面などは多くがばらばらになってしまっています。後年の整理によって、黒糸で綴られてまとめられている古文書もありますが、それらが内容的にすべて一致しているわけではないようです(写真1)。こうした現在の状態から、一点一点の古文書を作成当初の状態まで完全に復元することは、大変困難だと考えられます。そのほか、破損している古文書の一部が、簡易的な裏打ちにより補修されている点も特徴です。

さて、当該文書は昭和46年(1971)頃、重松明久氏(当時福井大学教授)により調査されたことがわかっており、一部の古文書には重松氏が原稿用紙に記した翻刻が付

属しています(写真2)。また、このときすでに当該文書は水に濡れて破損していたとみられ、上記のような古文書の整理や補修が行われたのもこの頃と推察されます。おそらく重松氏の調査以前に、残念ながら廃棄されてしまった古文書もあったのでしょうか。この重松氏の調査成果は、早速『村誌 ふるさと北中山』(田中幸編、北中山小学校同窓会、1972年)のなかで活用され、「蓑輪文書」によって河和田川を利用した落井村固有の年貢納入のあり方などが紹介されています。

その後、当該文書は旧所蔵者宅で保管されてきました。旧所蔵者は重松氏から「大事なもののなので捨てないでください」と聞かされたといえます。落井町を流れる河和田川といえば、2004年の福井豪雨での氾濫が記憶に新しく、落井町にも大きな被害をもたらしましたが、当該文書については幸いにも目立った水損はなかったようです。

地域に残る古文書は、一見、ぼろぼろで価値がないと思ってしまうがちなものでも、じつはその地域が歩んできた歴史を物語る、ふたつとない貴重な資料だといえます。このような古文書をひとつでも多く、次世代へと守り伝えていければと願っています。

(久角健二)

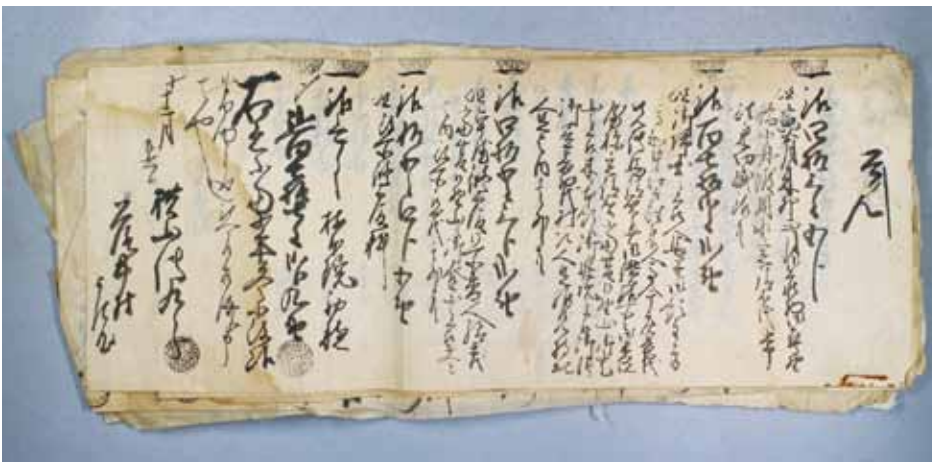


写真1



写真2

菅生石部神社の石造狛犬

福井県(越前)では、遅くとも16世紀前半から、「笏谷石」(福井市の足羽山で採掘された火山礫凝灰岩)で狛犬が作られてきました。神社の本殿・拝殿の中や縁などに置かれる「神殿狛犬」として用いられることが多く、県内各地の神社で確認されています。造形の特徴も共通し、台座から一体で彫られ、前脚を揃えて腰を下ろした簡素な姿、肩につくくらいのたてがみや、広がらずに体に貼りつく房状の尾などが、変化しながらも幕末ごろまで受け継がれました。そうした狛犬たちを「越前狛犬」と呼んでいます。

この越前狛犬は日本各地に分布しています。北海道から鳥根県に至る日本海沿岸、岐阜県、愛知県を中心とした東海地方、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県といった近畿地方でも確認され、総数は100件以上に達しています。

今回は、石川県加賀市の菅生石部神社の石造狛犬を紹介します。「越前狛犬」の特徴を備えつつ、検討課題も多い、興味深い狛犬です。

一. 菅生石部神社について

—『国幣小社菅生石部神社由緒記』(昭和13年)より

菅生石部神社は、加越国境近く、石川県加賀市大聖寺敷地にある神社です。祭神は「菅生石部神」で、天津日高日子穗々出見命、豊玉毘賣命、天津日子高津日子波限建鸕草葺不合命の三神が挙げられています。「延喜式神名帳」では加賀国江沼郡11座のうちに記載され、皇室、貴族、武家の尊崇を得て、越前国三ノ宮、後に加賀国二ノ宮となつたとされます。

江戸時代には、当初は加賀藩、寛永16年(1639)に

加賀藩から大聖寺藩が立藩された後は大聖寺藩からの手厚い保護を受けました。『大聖寺藩史』(昭和13年)には、「江沼郡一の総社とも云ふ可き」「藩侯も厚く之を尊崇し、恰も藩の守護神の観ありき」と記されています。毎年7月に行われる「敷地天神講」は大聖寺藩の藩祭とされ、2月の「御願神事」(竹割祭り)は、石川県の無形民俗文化財にも指定されています。また、蒔絵角赤手筥(附文章一卷、重要文化財)をはじめ、文化財を数多く伝えていることでも有名です。

二. 菅生石部神社の「越前狛犬」

以前から、菅生石部神社には、10点(うち、阿吽の対が確認できるものは4対)の越前狛犬があることがわかっていました。それらはすべて屋外にあり、神社を訪れば見ることができます。これらについては、後に触れます。

今回ご紹介するのは、上記の狛犬とは別に、神社の拝殿の中に置かれている石造狛犬です(狛犬1 写真1～6)。ふだんは拝殿の外からお参りするため人目につかず、あまり知られていませんでした。阿吽の一对がそろい、拝殿から本殿に向かって右に阿形、左に吽形が置かれています。傷みや風化の痕跡が少なく、屋内または直接の風雨にさらされない場所に置かれていたと考えられます。なお、銘文は彫られていませんでした。

まず、大きさを見ていきます。阿形は、高さ56cm、台幅20.5cm、台奥行きが38.5cmです。吽形は、高さが56cm、台幅21cm、台奥行き38.5cmで、ほぼ同じサイズです。頭部が大きめで、ずんぐりとした姿です。

阿形、吽形の造形は基本的には共通です。長方形の



写真1(吽形)



写真2(阿形)



写真3(阿形)



写真4(阿形)

台座に前脚をそろえて腰を下ろして座り、前脚はほぼまっすぐ下ろされています。体軀を横から見ると、背中がゆるやかに湾曲していることがわかります。

たてがみは直毛で、深い線刻で房が表現され、先端は剣先形に仕上げられています。尾はひと房を線刻で3条に分け、先端は外巻です。これらの特徴は、17世紀前半の越前狛犬に見られるものです。

顔を見てみましょう。目は大きく見開かれたつり目で、輪郭と眼球が立体的に彫られています。耳は立耳で、鼻筋から額にかけて突起が立ち、その両側に巻き毛風の眉が線刻されています。あご下にはヒゲが立体的に彫られています。上唇のラインがそのままたてがみにつながっており、金沢市の大野湊神社(元和8年[1622]の銘文あり)をはじめ、17世紀の越前狛犬に見られる形です。吽形にのみ、小さな角と明瞭な男性器が表現されています(写真1・5)。

この狛犬の大きな特徴は、全身に彩色の痕跡があることです。体軀やたてがみの黒っぽい痕跡、口腔の朱色、台座の赤色に加え、耳、歯、目には金色が残っています。他にも越前狛犬で彩色が確認される例はありますが、そのほとんどは、口に赤、瞳に黒が入られたり、前脚に筋肉のようなラインが墨で描かれたりといった簡単なもので、全身にはっきりした彩色痕があるものは珍しいのです。とはいえ、現状では、顔料の種類がわからないため、彩色の時期は特定はできていません。今後の検討課題といえます。

造形で見ると、この狛犬は17世紀前半の越前狛犬の特徴を備えています。いっぽう、石材が一般的な笏谷石に比べて色味が薄く、火山礫のまざりが少ない点が気になります。加賀地方では、地元石材を用いた狛犬が作られた可能性があること、また、同じ神社に17世紀初頭には越前から狛犬が持ち込まれていることなどを考えあわせながら、検討する必要があります。

ちなみに、神社では、この狛犬を「慶長の狛犬」と伝えてきたそうです。前述の『由緒記』によれば、慶長6

年(1601)に加賀藩主の前田利長、元和5年(1619)に前田利常によって社殿の造営・改修が行われたとされ、元和5年には前田利常室(天徳院)によって蒔絵角赤手筥が奉納されています。そうした奉納と結びつけられたとも考えられます。

三. 境内の「越前狛犬」

境内にある白山社・事比羅社(合祀)の前には、3対と2点、計8点の石造狛犬が並べられています。石材は笏谷石で、高さ約20~50cmの大きさです。もともとは神殿内か、社殿の縁に置かれたものかもしれません。造形から、江戸時代のものと考えられます。

さらに境内の一角には、大型の狛犬1対も置かれていました(狛犬2 写真7~9)。破損が大きいものの、残存部分だけでも吽形は高さ58cm、奥行きが36cmあり、復元すると高さ70~80cmに及ぶでしょう。たてがみは房を明確に分けて垂らし、先端は巻き毛で、さらに剣先状の装飾(または退化したたてがみか)がみられます。前脚の付け根に巻き毛が立体的に彫られていること、胴体がゆるやかに弧を描くこと、吽形に明確な角と男性器があることなど(写真7・8)、17世紀初頭から前期の越前狛犬の特徴を備えています。造形を見る限りは、拝殿内の狛犬よりこちらのほうが古い形といえます。

今回、菅生石部神社様のご厚意により、貴重な石造狛犬を調査することができました。このほかにも、加賀市、小松市を中心とした南加賀地方には、こうした狛犬が残されていると考えられます。ひとつひとつを確認することで、石造奉納物の広まりや越前と加賀の交流の歴史をたどれることでしょう。地域の神社の社殿内に残されている石造狛犬について、情報をお寄せいただければ幸いです。

(瓜生由起)



写真5(吽形)



写真6(吽形)



写真7(吽形)



写真8(吽形)



写真9(阿形)

3月

- 2日(月)～6日(金)
施設メンテナンスのため休館
- 7日(土)
常設展示一部更新(歴史ゾーン)
- 7日(土)～4月12日(日)
文化財公開展「瀧谷寺の宝物 密教絵画と瀧谷寺文書」
(特別展示室)
- 7日(土)～4月21日(火)
写真展「古写真でふりかえる足羽川の情景」
(エントランスギャラリー)
- 7日(土)
文化財公開展
「瀧谷寺の宝物 密教絵画と瀧谷寺文書」展示説明会
(特別展示室)
- 17日(火)
博物館運営協議会(研修室)
- 21日(土)
ふくい歴博講座「お金が語る戦国時代」(研修室)
- 26日(木)
奈良文化財研究所来館(資料調査)
NEXCO中日本来館(資料調査)
- 28日(土)
文化財公開展
「瀧谷寺の宝物 密教絵画と瀧谷寺文書」展示説明会
(特別展示室)

4月

- 14日(火)
滋賀県立安土城考古博物館来館(資料貸出)
- 16日(木)
福井市文化財保護センター来館(資料調査)
- 23日(木)～7月3日(金)
写真展「北陸の鉄道」(エントランスギャラリー)
- 25日(土)～5月31日(日)
企画展「カメラが撮らえた皇族と明治の偉人たち
福井が生んだ御用写真師 丸木利陽」(特別展示室)
- 29日(水・祝)
企画展「カメラが撮らえた皇族と明治の偉人たち
福井が生んだ御用写真師 丸木利陽」展示説明会
(特別展示室)

5月

- 7日(木)
元興寺文化財研究所来館(資料調査)
- 10日(日)
キッズミュージアム
「ピンホールカメラで写真を撮ろう!」(研修室)
- 16日(土)
ふくい歴博講座「ふくいの天神」(研修室)
- 17日(日)
日本美術刀剣保存協会福井県支部来館(資料調査)
- 21日(木)～22日(金)
北信越博物館協議会総会(富山県魚津市)
- 23日(土)
企画展「カメラが撮らえた皇族と明治の偉人たち
福井が生んだ御用写真師 丸木利陽」展示説明会
(特別展示室)

6月

- 5日
福島大学来館(資料調査)

7月

- 15日(月)～24日(水)
施設メンテナンスのため休館
- 25日(木)～7月5日(日)
館蔵資料公開「姉川合戦図屏風」(オープン収蔵庫)
- 25日(木)
読売新聞社来館(資料調査)
福井市文化財保護センター来館(資料貸出)
- 28日(日)
館蔵資料公開「姉川合戦図屏風」展示説明会
(オープン収蔵庫)
- 4日(土)～8月31日(月)
写真展「海の風景」(エントランスギャラリー)
- 4日(土)
石造物研究会来館(資料調査)
- 13日(月)
福井県立こども歴史文化館来館(資料貸出)
- 17日(金)
勝山市教育委員会来館(資料調査)
- 18日(土)
ふくい歴博講座
「越前の真言宗と伊勢信仰一国山町愛染寺像を例に」
(研修室)
- 20日(月)
富山大学来館(施設見学)
- 23日(木)～8月31日(月)
企画展「ふくいの海と川の漁」(特別展示室)
- 24日(金)
福井県博物館協議会総会(研修室)
ポプラ社来館(資料調査)
- 25日(土)
企画展「ふくいの海と川の漁」展示説明会(特別展示室)
- 26日(日)
ワークショップ
「ピンホールカメラで写真を撮ろう!」(研修室)

8月

- 3日(月)～8日(土)
博物館実習
- 7日(金)
NHK福井放送局来館(資料調査)
越前市教育委員会来館(資料調査)
- 8日(土)
キッズミュージアム
「お魚かるた大会&缶バッジ作り」(2Fロビー)
- 10日(月)
福井市中学校社会科授業研究委員会研修
- 20日(木)
富山県[立山博物館]来館(資料貸出)
- 21日(金)
柏市教育委員会来館(資料調査)
福井県文書館来館(資料貸出)
- 23日(日)
企画展「ふくいの海と川の漁」展示説明会(特別展示室)
- 26日(水)
博物館運営協議会(研修室)